

〔追悼〕

田中恭子先生を偲ぶ

田村 慶子

2007年9月4日、田中恭子先生が永眠されました。68歳、研究者としてまだまだこれからというご年齢でした。

私が田中先生のお名前を初めて知ったのは、1985年夏、シンガポール国立大学日本研究科長室で当時の研究科長(Dr. C.M. Seah)とお話していたときでした。日本研究科が1981年に日本の資金援助で設立された学科であることは知っていたのですが、その設立委員会の名簿に「Dr. Kyoko Tanaka」を見つけたのです。田中先生は、オーストラリア国立大学大学院で博士号を取得された後、1973年から9年間シンガポール大学(シンガポール国立大学と名称が変更されたのは1980年)の教壇に立ち、アジア史や中国史などを担当される傍らで、日本研究科の設立に尽力されたのだと、そのとき研究科長が話してくださいました。日本研究科は順調な発展を遂げ、2006年には創設25周年を迎えています。

1982年末に帰国された田中先生は、シンガポール9年間の貴重な体験を、『シンガポールの奇跡—お雇い教師の見た国づくり』(1984年、中公新書)にまとめられました。マレーシアから65年に分離・独立した小さな都市国家の発展がいきいきと描かれているこの本を、大学院に入学したばかりの私は、胸を躍らせながら読んだのをよく覚えています。

先生に初めてお会いしたのは、1988年頃の日本国際政治学会全国大会だったかと思います。受付を済ませた私の後ろで、「田中先生、日本の大学の教壇はどうですか？シンガポールと違って戸惑っていませんか？」という大きな声が聞こえ、振り向くと、小柄で上品な女性がどなたかと話していらっしゃるのが見えたのです。「きっとこの方が田中恭子先生だろう」とご挨拶のタイミングをうかがっているうちに、その上品な女性は多くの人に囲まれてしまい、大学院生の私が割り込む余地は無くなってしまいました。

「あなたが田村さん？」—田中先生からこんなふうに直接声をかけられたのは、それから数年後の、やはり日本国際政治学会かアジア政経学会だったかと思います。幸運にも、1993年に私は『頭脳国家シンガポール—超管理の彼方に』という小著を世に問うことが出来、田中先生はそれを読んでくださっていました。数年前にお見かけした時の印象と同じ、小柄で上品な方でした。

それからは、いくつかのプロジェクトに声をかけていただくようになりました。1996年～98年度「重点領域研究—現代中国の構造変動」では、私は公募研究者として田中先生が代表を務められた「アジア太平洋班」に97年度から入れていただきました。2001年には、香港で行われた日本国際政治学会と世界政治学会の合同セッションにもお誘いいただきました。最近では、2001年度～2003年度科研「東南アジア地方華人の地域間移動に関する実証的研究」（代表は三重大学の荒井茂夫教授）でもご一緒しました。

このようななかで強く印象に残っているのは、まず、先生の研究対象地域に根ざした真摯なご姿勢です。9年間過ごされたシンガポールはもちろんのこと、マレーシアの華僑・華人調査のためにマレーシア各地を歩き、多くの方のいろんな話に耳を傾けていらっしゃいました。中国の華僑農場（中国に帰国した華僑・華人の一部を収容するために作られた国営農場）の研究では、福建と広東の華僑農場での聞き取りという貴重な調査もなさっています。華僑農場の調査はこれまでほとんど行われていませんでしたから、先生の聞き取りと実態調査は貴重なものといえるでしょう。ご自身の研究テーマに関する史資料にはすべて眼を通すだけでなく、現地を歩き回られる先生は「万里の路を行くのは万卷の書を読むに勝る」という言葉を実践なさっていたように思います。『国家と移民—東南アジア華人世界の変容』（名古屋大学出版会、2002年）は、そんな先生の研究の集大成であり、第14回アジア・太平洋賞特別賞を受賞されるに相応しいご高著であったと思います。

また「万里の路を行く」田中先生は、本当にお元気な方でした。上述の「アジア太平洋班」の研究合宿や勉強会は、田子の浦（静岡）、彦根、鈴鹿など各地で開催されたのですが、研究報告が終わると街の散策に連れて行っていただきました。彦根では、研究会で履いていらっしゃったハイヒールをウォーキングシューズに履き替えられ、「さあ、行きましょう」と彦根城に続く急勾配の坂を先頭に立って上っていかれたのは、田中先生でした。鈴鹿での研究会の後に、伊勢神宮の広い敷地を案内してくださったのも田中先生でした。香港セッション終了後に、先生とマカオ日帰り旅行をしたこともあります。マカオ行きのフェリー乗り場はとても込んでいたのですが、先生は平気で人ごみをかき分けて早足で進まれ、おかげで私も無事にフェリーに滑り込むことができました。

そんな元気で闊達な先生でしたから、脳梗塞で手術され、長期に入院されていると聞いたときには耳を疑いました。昨年9月、名古屋の病院にお見舞いにかがったときは、お身体はほとんど動かせないものの少しずつ快方に向かっている様子を見て、時間がかかるけれど先生とまた一緒にプロジェクトが出来ると信じておりました。

あの時お会いしたのが最後になるとは、夢にも思っていませんでした。
田中先生、長い間本当にありがとうございました。どうか安らかに眠りください。